

ありがとう、ドラえもん

大塚美佑・細江美月

2014年夏、北米で日本の国民的アニメ「ドラえもん」の放送が始まった。日本国内でもドラえもん初の試みとなる3D映画「STAND BY ME ドラえもん」が500万人以上の動員数を記録し、昨今、ドラえもんをはじめとする藤子・F・不二雄作品の人气が加速している。2011年9月、川崎市に藤子・F・不二雄ミュージアムがオープンした。

ドラえもんは1969年に「小学一年生」をはじめとする子供向けの漫画雑誌で連載が始まった。1979年にはアニメの放映も始まり、多くの子供達に人気を博した。その子供向けというイメージから藤子・F・不二雄ミュージアムをドラえもんのテーマパークと想像する人も多いが、原画の展示など美術館的役割が中心となっている。ドラえもんだけではなく大人向けの作品など他の藤子・F・不二雄作品の展示も多くあり、懐かしい原画を通して中高年層の関心をひきつけている。同時に「つなぐ未来へ」というコンセプトのもと、1996年に亡くなった藤子・F・不二雄を知らない子供たちへも彼の作品の魅力を伝えていくことをミュージアムの理念としている。さらに近年は日本国内にとどまらず、アジアを中心に海外からの来場者も多く集めている。

ミュージアムのもう一つの理念に「ファンへの恩返し」がある。少ないお小遣いを握りしめ漫画を楽しみにしてくれていた方々への恩返しをしたい、という作者の夫人の思いがきっかけだ。藤子自身も、生前来客に対するおもてなしを非常に大切にしていた。藤子は来客を迎え入れた瞬間からドアを出て帰る瞬間まで、来客のことを第一に考え気にかけていた。「忙しい時は余裕がなくなってしまうがちですが、そういう時こそ笑顔を中心掛けています。」スタッフは笑顔で語る。

ミュージアムに大勢入場すると満足な見学が出来ないことから、完全予約制で入場人数の制限を設けゆったりとした空間で見学できるよう工夫している。他にもこどもの音声ガイドにはクイズのしかけをするなど、きめ細かな心遣いが伺える。また、ミュージアム敷地内の森にはドラえもんの秘密道具、壁には作家の元アシスタントが丁寧に描いたドラえもんの目が隠れているなど、ファンが楽しめる仕掛けが多く見られる。

「ミュージアムはミュージアムだけで成り立っているのではなくお客さまをはじめ様々な関係者との関わりで成り立っており、そこに携われることが嬉しいです。」とスタッフは話す。「この幸せをお客様にも伝えたい。」

【編集後記】

子供から大人になる過程の中で、私たちは様々なものを見て考え、想像力・夢を膨らませます。藤子・F・不二雄作品はこれからもこの先も、子供たちの成長の一翼を担うと共に、大人になった人々の心の中で懐かしさ・温かい思い出として残り続けることと思います。“恩返し”の精神が息づく藤子・F・不二雄ミュージアムで、ドラえもんをはじめとする藤子・F・不二雄作品が過去、現在、未来をつなげていることを実感できました。細かな心配りあふれるこのすてきなミュージアムに多くの方が訪れ、藤子作品の魅力に触れられることを願います。

大塚美佑

小さい頃毎週金曜日の夜が待ち遠しかったのを覚えています。テレビの前を占拠して夢中でドラえもんを観ていました。自分でどうにか秘密道具を作ってやろうとお菓子の箱で奮闘したこともありました。大好きなドラえもんやチンプイがいる不二子・F・不二雄ミュージアム取材することが出来て本当に幸せです。快く取材を受け入れて、丁寧に館内を案内してくださった広報部の方に感謝しています。大人になった今でも私を楽しませてくれる不二子・F・不二雄作品がいつまでも子供たちの心の中で生き続けてくれることを願います。

細江美月